別紙２

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　石井洋二郎

『ロートレアモン　越境と創造』と題する本論文は、１８４６年、ウルグアイのモンテビデオで生まれ、『マルドロールの歌』、『ポエジーI』、『ポエジーII』の三作だけを残して２４歳で世を去ったフランスの詩人、イジドール・デュカス(『マルドロールの歌』は、筆名「ロートレアモン伯爵」で発表）をめぐる本格的論考である。石井氏は、シュールレアリストたちにはじまり現在に至るデュカス＝ロートレアモン研究を四段階に分け、自らの研究を、テクスト分析と実証的研究を融合させたロートレアモン研究史第五段階の作業として位置づけている。石井氏はデュカス=ロートレアモンの、テクストと実人生の双方に、「越境」という共通のテーマを見出し、種々の越境が、詩人ロートレアモンの豊かな創造へと結びつく過程を詳述している。以下にまず本論文の構成を述べる。

第Ｉ部 モンテビデオ(第１章～第３章)

モンテビデオ時代のイジドール・デュカスについて述べられる。はじめに大航海時代から１９世紀中庸までのウルグアイの歴史が概観されたあと、イジドールの両親のこと，とりわけイジドールが一歳の時に死亡した母親のことが述べられる。またこの母親の面影が『マルドロールの歌』でどのように表象されているかについても語られる。次いで、フランス語とスペイン語の「二言語併用者」であったデュカスの、言語間の「越境」について触れられたあと、モンテビデオの疫病や戦争の記憶がデュカスのテクストの中に、どのような形であらわれているかの分析がなされる。

第 II 部タルブとポー（第４章～第９章)

１３歳ではじめて祖国フランスの地を踏んだデュカスの、タルブ、及びポーにおける高等中学時代について述べられる。まずタルブでの寄宿生活と、タルブで知り合った年下の少年ジョルジュ・ダゼットについて語られたあと、ダゼットがテクスト中で、いかなる形象のもとに描き出されているかが考察される。ついでポー時代のデュカスの様子が、友人であったポール・レスペスの証言に基づいて再現される。

間奏曲　第１０章　モンテビデオふたたび

モンテビデオに一旦帰国したデュカスが、どのような人物と交流したかについて語られる。

第 III 部　パリ（第１１章〜第１７章）

モンテビデオでの滞在を終えてフランスに戻ってから、１８７０年の死までの期間が取り上げられる。この期間に、いよいよ、『マルドロールの歌』、『ポエジーI』、『ポエジーII』の三つの作品が発表される。はじめに『マルドロールの歌』に関して、その出版の経緯に関する説明や、この作品の作者名である「ロートレアモン伯爵」という名をめぐる考察、「パリ」、「垂直性」、「マルドロールの身体」という三つのテーマに即した詳細なテクスト分析が試みられる。次いで、『ポエジーI』、『ポエジーII』の二作が提起した、真理の不在という現代的問題の射程が検討される。

結論

以上１７の章が、「越境と創造」という観点から改めて振り返られる。

以上のように石井氏の論文は、詩人の生の軌跡の綿密な描出と、書かれたテクストの精緻な読解とからなる、きわめて野心的な労作である。石井氏自らが書いているように、これまでデュカスに関する、日本語による本格的なモノグラフィーは存在していなかったが、今後、この論文が、日本におけるデュカス研究にとって、必ずや参照されるべき、第一級の基本的論文となることは間違いない。

この論文の特筆すべき長所は、以下の三点である。

第一は、渉猟された資料の量的充実である。渉猟の対象は、デュカス研究の前史をなす、詩人の死後数十年間に書かれた資料にはじまり、石井氏自身が四期に分ける、１９２０年代から現在に至る研究史全般に及び、とりわけ、１９８０年代にはじまる、研究史第四期（「実証的資料発掘」の時代）に関しては、きわめて細かい資料にまであたった上で、その収穫を、論文の記述の隅々に反映させている。

第二は、それら膨大な資料の、読解の質の高さである。原文のフランス語の一字一句の微妙なニュアンスをないがしろにせず、それらと等価の、達意の日本語に置き換える、氏のフランス語読解力、日本語表現力の高さは、既に２００１年に刊行された個人訳『ロートレアモン全集』において証明されているが、今回は、それらの能力が、資料の彼方にある、デュカスの生の軌跡の、可能な限り正確な把握とその再構成という作業のなかで、如何なく発揮されている。

第三は、この研究が、他の研究者や読者に開かれたものであるという点である。本論文の論述は、ほぼ常に、単なる事実の提示に終わらず、個々の事象についての、石井氏の見解、解釈、仮説等を明快な論理に従って示したものとなっている。各々の読者はそれら論述の内容を正確に把握した上で、自らの見解を自由に展開することができる。また、引用・言及した資料の出典も、正確かつ詳細に示されており、読者が原文にあたることはきわめて容易である。

無論、審査員からの批判や指摘も皆無ではなかった。例えば、デュカスの二言語併用の事実をあらわすものとして挙げられている例が必ずしも適当でないという指摘や、そもそも、デュカスのスペイン語能力が過大視されているのではないかという指摘があった。また、いくつかのテクスト読解については、過度に断定的であり、読解の前提に関する、より慎重な吟味が必要だったのではないかという指摘がなされた。さらに、最終的にはテクスト読解を重視する石井氏の立場と、本論文におけるテクスト外的要素の占める比重の大きさとの齟齬が指摘された。

しかし、これらはいずれも、この論文の全体としての質の高さを、本質において損なうものではない。またそれらの指摘の多くは、上述の、この論文の開かれた性格に起因する、自由な議論の一部であると言うこともできる。

この論文が、当該領域の研究において大いなる寄与を果たしたことは間違いないと判断される。

以上から、本審査委員会は、全員一致で、本論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定した。